

氏 名	ひがし 東 村 知 子
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 279 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	正規の学校教育の周辺に存在する教育活動に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 杉 万 俊 夫 教授 鯨 岡 峻 教授 岡 田 敬 司

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、正規の学校教育の周辺に位置する教育活動に関する実践的フィールドワークを行い、そこでの知見を通して学校教育を相対化しようとしたものである。具体的には、①不登校生・高校中退者を支援するサポート校、②土曜日に子どもの居場所づくりの活動を行っている市民ボランティア・グループ、③障害や発達に遅れのある乳幼児とその親を支援している療育施設という3つのフィールドにおいて現場研究を行っている。これらの現場研究によって明らかにされた教育活動の特徴を、エンゲストロームの活動理論を援用して分析・整理し、現在の教育と子育てにおける問題を改善する可能性を見出そうとしている。

本論文は6章からなる。第1章では、まず、本研究で取り組む3つの問題——学校教育、家庭における子育て・教育、障害をもつ子どもの養育・教育——を整理している。次に、あえて正規の学校教育の現場ではなく、それを取り巻く周辺的な教育実践の事例に着目することの意義について論じている。

第2章では、本論文の理論的視点となる活動理論を概説している。活動理論では、人間の活動は、(活動の)主体、(活動の)対象、(主体と対象を)媒介する人工物(アーティファクト)、(主体を包含する)共同体、(共同体の)ルール、(共同体内の)分業という6つの要素からなる動的構造体として把握される。既成の活動を対象として、そこに内包される矛盾を顕在化させ、新しい活動へと変換する活動は学習活動と呼ばれるが、本研究で取り上げられる周辺的教育活動は、既成の学校教育を変革する可能性を秘めた学習活動として位置づけられている。

第3－5章では、上記3つの現場研究について述べられている。まず、第3章では、サポート校「C学院」の事例を取り上げている。現在の高校教育は、高校全入の時代を迎える一方で、多くの中退者や不本意入学者が生み出されるという矛盾を抱えている。学校には行けないが高校卒業資格はほしいと考える生徒とその親は、多くの場合、通信制高校を進路として選ぶことになるが、彼らにとって通信制高校を自力で卒業することは決して容易ではない。サポート校は、通信制高校と提携し、そうした生徒の卒業を支援する私塾であり、近年急速に増加している。

本章では、C学院における教師の生徒への関わりの特徴を、教師と生徒の関係、授業、生徒一人一人への対応という3つの領域ごとに整理している。第1に、C学院では、生徒と教師が友だちのように親しく接することが自明視されていた。第2に、C学院には、ふだんの授業と、通信制高校卒業に必要な授業の2種類があり、その使い分けがなされていた。第3に、C学院では、全員に対する一斉指導よりも、「イレギュラー対応」と呼ばれる一人一人に対する個別の指導が重視されていた。こうした特徴が、不登校経験のある生徒、学力の低い生徒にとって有効であることを具体的な事例によって示しながら、サポート校の意義について論じている。さらに、活動理論に基づき、サポート校教師と学校教師の活動を対比させることを通して、通常の学校教育活動に内在する矛盾を明らかにしている。

第4章では、公立学校の完全週5日制が始まった2002年以来、土曜日に学校を使って子どもたち(小学生)に勉強を教えるという活動を行っているボランティア・グループ「てらこや NEYAGAWA」の事例を取り上げている。学校教育の限界

と家庭の教育機能低下を背景に、近年では、地域コミュニティが教育に関わる必要性が認識されつつある。しかし、地域社会のつながりが失われつつある今、それはどうすれば可能になるのか。これが本章の問題意識である。

本章では、まず、このグループの発足から現在に至るまでの経緯が詳細に述べられている。てらこやは、3人の発起人によって立ち上げられ、ともかくスタートを切ったあと、運営の行き詰まり、学校との関係悪化など多くの問題にぶつかったが、そのたびに何とか問題を乗り越えて現在まで活動を継続してきた。てらこやの活動には、おとなと子どもの自由な関係と、気軽なボランティア活動という2つの特徴があるが、自由な関係という特徴が現代の子どもにとって貴重な経験であること、また自由な関係が生まれる場を作るための鍵が、気軽さという特徴の中にあることが指摘されている。さらに、活動理論に基づき、このグループの活動が、従来の「学校依存の教育」を脱して「地域で育む教育」という新しい活動を創造する活動となる可能性を有していることが論じられている。

第5章では、就学前障害児のための通園施設「P園」における現場研究が取り上げられている。本章では、まず、障害をもつ子どもとその親が乳幼児期から学童期の初めに直面するさまざまな問題、および施設における支援のもつ意義と課題が、現場研究に基づいて論じられている。その上で、卒園児の親から通園児の親へのメッセージを活用したサポートシステムづくりの試み（申請者独自の試み）について述べられている。具体的な手続きは以下のとおりである。申請者が、P園を卒園した子どもの母親2名にインタビューを行い、それをもとにメッセージを作成、そのメッセージを通園児の親に読んでもらいアンケートに答えてもらった。アンケートで得られた回答は、卒園児の親にフィードバックされた。アンケートとフィードバックに現れた親の反応から、語り手の「人生の物語」が聞き手が自らを映す鏡となり、聞き手の「人生の物語」が語り手の鏡になるという新しい関係性が紡がれたことが示唆された。この試みについて活動理論を用いた検討がなされ、その意義と可能性が論じられ、申請者自身の介入の方法についても分析が行われている。

最終章（第6章）では、以上3つの現場研究の成果を総括した上で、周辺性に注目することの意義と活動理論の有効性が考察されるとともに、周辺的教育活動に関する今後の展望と研究課題が提示されている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、正規の学校教育の周辺に位置する教育活動を参与観察型の現場研究によって詳細に検討することによって、学校教育を相対化し、その問題点と改善の方向性を提示しようとしたものである。具体的には、①不登校生・高校中退者を支援するサポート校、②土曜日に子どもの居場所づくりの活動を行っている市民ボランティア・グループ、③障害や発達に遅れのある乳幼児とその親を支援している療育施設という3つのフィールドにおいて現場研究を行っている。また、これらの異なる現場研究の成果をエンゲストロームの活動理論を用いて体系的に分析・整理し、現場の個別特殊性を越えた結論を導出している。

本論文で取り上げられている3つの現場研究はいずれも、申請者が長期にわたり当事者との協同的实践に携わる中で行われたものである。①不登校生・高校中退者を支援するサポート校における現場研究は、準備期間を含めて2年間を費やし、サポート校の教師や生徒との濃密な関係を形成しつつ実施された。その結果、教師と生徒の間に通常の教師－生徒関係からは想像できないような対等な関係が形成されており、その対等な関係が生徒の教師に対する信頼の基盤になっていること、また、授業や行事に出てこない生徒も、決して切り捨てられることはなく、「イレギュラー対応」という名の下に徹底的な個別対応がなされていること（イレギュラー対応がレギュラーに実施されていること）を見出している。これらの結果については、活動理論の立場から、サポート校では徹底して生徒に寄り添い、生徒の目覚めを待つ姿勢が日常の活動として定着していると解釈されているが、定められたカリキュラムをこなす大学受験に備えるため、時間に追われがちな通常の高校に欠落している側面を、事例をもって指摘した点は興味深い。

②土曜日に子どもの居場所づくりの活動を行っている市民ボランティア・グループに関する現場研究は、約3年前のグループ発足時から申請者もグループの一員として活動に参加しつつ、継続的に行われてきたものである。この実践的研究の意義は、一昔前には珍しくなかった「ななめの関係」（親と子という垂直の関係ではなく、近所のおじさん・おばさんと子どもたちの関係）における教育機能の復活をねらいつつも、それをコミュニティの絆が弱体化している都市部において、しかも、学校を場として実践しようとしていることである。申請者は、自らの現場研究をふまえて、中心メンバーはかなりの負

担を背負いつつも多くのボランティアメンバーには気軽な参加を保証していくことが活動の継続を支えており、あえて学校という場にこだわることで、学校との緊張関係も経験しつつ、学校を変化させる契機にもなりうると論じている。

③障害や発達に遅れのある乳幼児とその親を支援している療育施設（P園）における現場研究は、申請者が指導員の一人として6年間にわたって行ってきた長期的な研究である。申請者は、その間に築いた子ども、親、他の指導員との信頼関係に立って、単なる外部者には見て取れない子どもたちの成長、親の苦悩と喜び、指導員の努力と限界を描き出し、活動理論により分析している。申請者が独自に開始した試み、すなわち、卒園児の親からメッセージを収集し、それを申請者が編集した上で通園児の親に渡し、その反応を再び卒園児の親にフィードバックするという一連の試みも、申請者の長期にわたる実践研究があつて初めて可能になったものである。その試みは、ある程度の成功を収めつつあることが報告されている。一見すると小さな試みにすぎないように見えるが、申請者が論じているとおり、活動理論の視点から見れば、子ども・親・指導員に限定されていた活動システムに卒園児の親をも巻き込む新しい活動システム構築の試みであり、卒園児の親にとっても過去を想起することによって自らの「人生の物語」を紡ぎなおし、次の世代に伝達する機会をつくる実践的にも重要な試みである。

以上のように、本研究は、通常の保育所や、幼稚園、小学校、高等学校という正規の教育機関とは異なる周辺的な場において行われている教育活動を対象に、当事者との協同的实践を展開しつつ行われてきたものである。一つ一つの現場研究は、いずれも長期にわたって精力的に行われ、外部者では見出すことができない知見を明らかにしており、それを活動理論によって考察する中から正規の学校教育に対する含意を抽出している。

このように、本学位申請論文は、人間の発達の・社会的形成の問題に取り組んだものであり、人間・環境学専攻人間形成論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。また、今後の学校教育にも実践的示唆を与えるものと思われる。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年1月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。